

平成20年 6 月 1 日発行

発行：学校法人皇學館
編集：法人本部総務課

TEL0596・22・6308
E-mail : soumu@kogakkan-u.ac.jp

皇學館学園報

第16号

■伊勢学舎

[法人本部・大学院・専攻科・文学部]
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL0596・22・0201(代) FAX0596・27・1704

■名張学舎

[大学院・社会福祉学部]
〒518-0498 三重県名張市春日丘7番町1番地
TEL0595・61・3351(代) FAX0595・61・3350

●インターネットホームページ
http://www.kogakkan-u.ac.jp

学生有志四十七名が奉仕 皇居勤労奉仕

本学学生有志により結成された「皇居勤労奉仕団」が三月三日から六日までの四日間にわたり、皇居と東宮御所(赤坂御用地)で勤労奉仕を行った。参加した団員は四十七名。三月二十七日には大学本部会議室にて「報告会」が催され、団長を務めた神道学科二年・徳田悟万さんが団員とともに清掃に従事した際の様子や天皇・皇后両陛下から御会釈を賜ったことなどを感激の面持ちで報告した。



天皇・皇后両陛下、 皇太子殿下より御言葉を賜る

奉仕団の団員四十七名は三月二日の午後二時、靖国神社に集合。翌三日から始まる勤労奉仕を前に心身を洗い清めた。皇居での奉仕活動は午前八時三十分から午後四時まで(昼食・休憩時間を含む)。初日となる三日、一行は吹上御苑内の宮殿付近で竹箒を手に清掃を行った。そして、二日目の四日はいよいよ一般には入れない皇居東御苑へ。その際、天皇・皇后両陛下から御会釈を賜り、「苦勞様です」「ありがとう」の御言葉をいただいたという。団員のひとり、神道学

科三年の野原月子さんは「美智子皇后様から『これから御遷宮になって、伊勢も賑やかになって参りますね』と御声掛けいただいた」と興奮冷めやらぬ様子で語り、皇學館大学の存在を覚えてくださっていることに感動するとともに、例えようのない神々しい御姿に心を動かされたと話した。団長の徳田悟万さんは三日

一般には入れない皇居東御苑へ。その際、天皇・皇后両陛下から御会釈を賜り、「苦勞様です」「ありがとう」の御言葉をいただいたという。団員のひとり、神道学

二十七年ぶりに 勤労奉仕団が復活

本学学生有志による勤労奉仕の歴史は昭和五十一年に遡る。当時、大学助手であった清水潔文学部長は敗戦もない昭和二十一年に宮城の青年たちが勤労奉仕を願いだした話に感銘を受け、自らも団を結成して申し出た。幸い宮内庁から許可があり、皇居での勤労奉仕が実現したのだという。

他の奉仕団との交流も

恒例行事として続くことを願ったものの、あさま山荘事件や学生運動激化などの社会事情を鑑み、たのか翌年の申請の際は宮内庁側から見合わせの返事があり、有志の灯は自然と消えていった。それから二十数年の時を経て、清水文学部長が授業の合間に何気なく当

三月二十七日に本部会議室で行われた「報告会」には参加した団員全員が出席し、伴五十嗣郎学長に無事、奉仕を完遂できた喜びを語った。



奉仕活動の様子や感想を語る徳田さんと団員。

恒例行事として続くことを願ったものの、あさま山荘事件や学生運動激化などの社会事情を鑑み、たのか翌年の申請の際は宮内庁側から見合わせの返事があり、有志の灯は自然と消えていった。それから二十数年の時を経て、清水文学部長が授業の合間に何気なく当

ど有意義な時間を過ごしたことを報告していた。この麗しき伝統がいつまでも受け継がれることを期待したい。

皇居勤労奉仕の記

昭和五十一年五月 清水 潔



今も当時のことを鮮明に覚えていいます、と清水文学部長。

皇居の勤労奉仕は、昭和二十二年十二月宮城県の青年六十余名が、皇室のために何かお役に立ちたいと願ひ出た事が発端となり、今日に至るまで継続されてきた。当時は戦敗れて人皆茫然自失、自分の生活を守るのが精一杯であり、占領軍将兵の威圧下、天子様のため

される天皇さまの日々の祈りで充溢している最も神聖な場所である。一同は極度に緊張、清掃をさせていた大きながら心より皇室の弥栄を祈念した。

第三は、五日皇后陛下に御会釈を賜った事である。天皇陛下はお風邪気味のため、お出ましはなかった。皇后さまより、「ご奉仕、苦勞さまで。仕事に精を出して社会に貢献して下さい。身体に気をつける様に。」との御言葉を賜り、一同で「皇后陛下万歳」を三唱、君が代を唱和した。これらの感動はいま一々筆舌に尽し難い。

四日間の奉仕を通じて絶えず頭にあったのは「君がイトホシフテナラヌ」(若林強斎)という「恋闕」(真木和泉守)の情であり、戦後世代の我々が如何にしてそうした心情に到達し得るかである。幕末尊王の志士達も幕藩体制下で、皇室との直接の体験がそれ程あったわけではあるまい。恋闕の情を培ったのは、天皇と国民の間の二千年にわたる歴史と伝統を明らかにした真剣な学問だ、道義への目覚めであった。私共はこれを機に一層「皇学」への意欲を燃やすと共に、この勤労奉仕を本学で恒例化してゆきたいと思う。

※当時の学園報より転載

日本人、信仰の独自性を再認識

「平成の大遷宮」を前に共同講演会

主催／皇學館大学・島根県立古代出雲歴史博物館

本学ならびに古代出雲歴史博物館が周年記念事業の一環として共同講演会を開いた。平成二十五年（二〇二二）にそろって迎える遷宮を前にした同講演会は五回シリーズ。その一回目が四月二十六日に島根県を会場に催され、座談会には二百人の聴衆が訪れるなど盛況を博した。

皇學館大学創立百三十周年・再興五十周年ならびに古代出雲歴史博物館開館一周年を記念する事業の一環として、本学と同博物館が共同主催で講演会を開いた。五回シリーズとなる講演会の総合テーマは「伊勢神宮と出雲大社の遷宮に学ぶ」。

平成二十五年にそろって迎える遷宮を前に、その意義や歴史を考え直すのが狙いだ。

第一回目は四月二十六日に島根県の「ビッグハート出雲」を会場に開催された。講演会はDVD上映のほか二つの講演と座談会による三部構成。講演①では本学の伴五十嗣郎学長が演壇に立ち、

「伊勢の神宮と日本人」との題目のもと、太陽を女神と仰ぐ日本の独自性に富む信仰形態や自然万物を同胞として捉える日本にあつて伊勢の神宮が極めて重要な位置を占めていることを熱く語った。座談会には出雲大社の千家と比古権宮司のほか、同博物館の上田正昭

名譽館長、本学からは伴学長と岡田芳幸准教授の四人が出席。上田館長は出雲国造家の祖先神が大黒天の信仰と習合して広がったこと、伊勢信仰が「おかげまいり」という言葉で発展した点に触れ、



神道の独自性について、熱弁を振るう伴学長。

平成二十年度 皇學館大学入学式

神宮大宮司・鷹司氏より祝辞

桜舞う四月二日、平成二十年度皇學館大学入学式が挙行された。文学部、社会福祉学部、教育学部のほか大学院、専攻科を含む七百八十二名が入学。このうち、二百四十五人が今年度から新設された教育学部に入學した。式では伴五十嗣郎学長が式辞を述べたほか上杉千郷理事長が告辞。来賓の神宮大宮司・鷹司尚武氏より新入生に祝いの言葉が贈られた。



「新入生の皆さんの輝ける前途を祝いたい」と鷹司氏。

伊勢学舎記念講堂において午前十時に始まった入学式では開式の辞、国歌斉唱の後、伴学長が「賀陽宮邦憲王令旨」を奉誦。続く式辞ではこの令旨が「建学の精神」を最も簡潔明瞭に、そして的確に表明するものとして大切に継承されてきたことを説いた。そして、日本人固有の信仰である神道を根幹に踏まえ、いずれの学科に属していても本学の堅実な学風を理解し、日本人にふさわしい学識と人格・識見を身につけることを忘れず努力してほしいと述べた。

来賓の神宮大宮司・鷹司尚武氏は祝辞の中で「日本人の心のふるさととして慕われる伊勢の地は名実ともに日本の精神文化の中核であり、この恵まれた環境の中で学問を深められるのは幸せなこと」と話し、本日の感激を胸に己を磨き、広い視野をもって専門分野の探究に研鑽を重ねてほしいと期待を述べた。

これに対し、新入生代表の五人が宣誓を行い、閉式の辞でもって入学式は滞りなく終了した。

オープンキャンパスで環境の良さやカリキュラムを知り教育学部への進学を決めたという中西安奈さんは、新設学部一期生であることを誇りに思うと話し、伝統を守りながらも新しいことにチャレンジしていきたいと意欲を見せていた。

式終了後、十一時から校歌指導および参拝作法の指導が行われた。その後、学生は保護者とともに移動。午後は外宮・内宮参拝に向かった。



建学の精神に根ざし国家有用の人材となるべく努力したいと宣誓する入学生代表者たち。

清めの雨の中 一年生が初の月例参拝

春雨の降る四月十七日、本学恒例の月例参拝が行われた。四月に入學を迎えた新入生にとっては初めての参拝行事。この日、午前八時半に宇治橋前に集合した学生たち一行は傘を手に玉砂利を踏みしめ正殿へと向かった。



手を清める姿も初々しい新入生たち。入学式で習いたての作法を友人と確かめ合う。

手水場では入学式で習ったばかりの作法を友人同士で確かめながら手を清める光景が見られた。正殿に参拝した後、別宮荒祭宮においては雨天のため伴五十嗣郎学長に合わせて一同が拝礼。厳かに予定の参拝が執り行われた。

国文学科一年生の大森由貴さんは「二礼二拍手のタイミングが難しかった」と語り、早く慣れて自信をもって臨めるようにしたいと話した。短大から編入したという神道学科三年生の佐藤仁美さんは清めの雨の中、心身が洗われた気がする」と清々しい表情を見せていた。

創立百三十周年・再興五十周年記念事業寄付者芳名⑬

宗教界（神社界）

館友（個人）

本法人関係

創立130周年・再興50周年記念事業寄付金 進捗状況				
平成20年 4 月30日現在				
区 分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)	
宗 教 界	620	756,327,000	674,057,000	
館 友	691	76,089,000	68,284,000	
篤 志 家	40	29,240,000	29,120,000	
募 の 会	1,534	59,723,000	59,723,000	
企 業	100	58,735,000	56,125,000	
本法人関係	241	56,842,000	51,534,000	
合 計	3,226	1,036,956,000	938,843,000	

青森県 三十万円 青森県神社庁様 （青森市浪館前田）	石川県 十五万円 高井 栄幸様	島根県 五万円 春山 健一様
栃木県 二十万円 宇都宮二荒山神社様 （宇都宮市馬場通り）	静岡県 五万円 奥山 陽介様 五万円 勝又 淳様	徳島県 五万円 馬岡 秀雄様
京都府 十万円 元伊勢籠神社様 （宮津市宇大堀）	三重県 五万円 千秋 季嗣様	愛媛県 五万円 大岡 忠徳様
福岡県 百万円 宗像大社様 （宗像市田島）	京都府 十万円 平安神宮有志一同様 六人部是充様	福岡県 二十万円 高向 正秀様 三万円 片山 豊孝様
熊本県 百万円 藤崎八幡宮様 （熊本市井川刈町）	兵庫県 三十万円「十五万円増額」 小田 文雄様	本法人関係 五十万円「二十万円増額」 大串竜紀夫様 十五万円 石川 達也様 十五万円 山口 剛史様
鹿児島県 六万円 市来神社様 （いちき串木野市）	個人情報保護に関する法律の施行に伴い、ご芳名・金額等の掲載をご希望されない方々につきましては、別記とさせていただきます。	
■神社／1社 ■館友／3名 ■募の会／3名		

第四十六回 皇學館高等学校入学式

期待を胸に四百三十一名が入学

桜咲く穏やかな陽気に恵まれた四月八日、伊勢学舎記念講堂にて皇學館高等学校の入学式が行われ、真新しい制服に身を包んだ四百三十一名（男子百九十三名、女子二百二十八名）が式にのぞんだ。



校長になった自身の経験を語り、日本人であることの重要性を伝えることができたかと抱負を語った。

磯部中学校出身の下村有那さんは吹奏楽部に入る予定と話し、将来は教師になりたいとイキキとした表情で話してくれた。加茂中学校から来たという西川潤くんはバレー部の先輩から進学を勧められたという、倉田山中学校出身の中村宇宙くんは陸上も勉強もがんばりたいと期待に胸を膨らませていた。

式典は十時から始まり、この春新たに就任した大島謙校長から新入生に対して式辞が述べられた。その中で校長は「努力する自由、なまける自由、どちらの自由を選ぶかでゴールは違ってくる。教養は夢と希望の栄養源なので、たくさんの栄養を摂って大きな夢をかなえてほしい」と励ましの言葉で祝いの代わりとした。また、民間から



大島学校長の話に真剣に耳を傾ける新入生たち。式は厳粛な雰囲気の中で執り行われた。

者は担任の誘導のもとそれぞれの教室に移動し、新しい学生生活を無事にスタートさせた。

平成二十年度 皇學館中学校入学式

六十四名を満開の桜が出迎え

四月七日午後二時より皇學館中学校のセミナーホールにて「第三十回皇學館中学校入学式」が行われた。

参列したのは、新入生六十四名（男子二十八名、女子三十六名）と保護者、学校関係者ら。まだあどけなさの残る新入生たちは、父母たちに見守られながら、やや緊張した面もちで式にのぞんでいた。

式の最初には、大島謙中学校長が厳粛な雰囲気の中で「令旨」を拝読。その後の祝辞では、大島校長が「学校生活では、色んなことがあるが、夢をもって勉学に励んでほしい」と歓迎の言葉を述べた。また理事長の上杉千郷氏は保護者へ向けて「伝統ある学校でお子さんをしっかりと預かりし、伊勢の心を伝えてい

民間出身の学校長
高・中校長に大島謙氏が就任



大島謙校長

本学高校・中学校の中村正昭校長の任期満了に伴い、新たに大島謙氏が就任した。大島氏は現在六十歳。米国ボストンの東芝アメリカ・ベンチヤー・キャピタル社の社長を務めた後、三重県初の民間人校長として県立白子高等学校長に就任。規律ある生徒指導の確立や吹奏楽コースの創設などに尽力

し学校改革に大きな成果をあげた。東芝ヨーロッパ社にも長年出向していた経歴から知られるように国際経験が豊富で、その体験を通して日本の歴史・伝統・文化を子どもたちに伝えることの重要性を認識するようになったという。もとより本学は神道を基盤に祖国愛の精神にのっとりた社会有為の人材育成を教育方針に掲げており、大島氏に就任をお願いしたところ幸いにも快諾いただき、着任の運びとなった。任期は平成二十年四月一日から二年間。



新入生たちは緊張しながらも、式辞や祝辞を肅々と聞いていた。



昨年の初穂刈に参加した際、厳かでありながら活気あふれる祭典に感動したという二人。

神恩感謝の想いを込めて
皇學館奉曳会がお田植え

学生有志からなる「皇學館奉曳会」の会員二十三名が四月二十九日、伊勢市勢田町の水田でお田植えに参加した。この日は十月十五日に行われる初穂刈のお初穂となるもの。当日は曇りつつない青空が広がり、学生たちは日焼けした顔に誇らしげな表情を浮かべ、作業に勤しんでいた。

初夏を思わせる陽気となった四月二十九日、秋の初穂刈行事に向けた御田祭が執り行われた。伊勢神宮奉仕会の方々及管理されている水田は伊勢西IC付近の「ひもろぎの里」手前にあり、約百七十平方メートルの広さ。当日

は伊勢神宮奉仕会青年部の方をはじめ皇學館奉曳会や地元ボーイスカウト・ガールスカウトの子どもたちなど総勢三百名ほどが参加した。同会のメンバーで神道学科二年の辻林秀嗣さんは、「泥に足がずぶりと沈み込む感覚が忘れられない」と話すなど、初めての田植えは新鮮で楽しい体験になったようだ。教育学科二年の後給静香さんは子どもたちのしやぐ様子が印象的だったと

語り、みな無事に田植えを終えることができたことがホッとしていた。同会に入会した動機を「由緒深い伊勢の地にある大学の学生として、貴重な経験ができるため」と語る二人。今回の田植えは自然の恵みや神の恩恵への感謝の気持ちを思い起こさせてくれるとともに、心身ともに充実した一日となった。



ほとんどのメンバーにとって田植えは初めての体験。秋の収穫が待ち遠しい。

つたようだ。植えた苗は八月後半に稲刈りの時期を迎える。

皇學館高等学校創立50周年・皇學館中学校創立35周年 記念事業寄付金進捗状況			
平成20年 4 月30日現在			
区 分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗 教 界	1	100,000	100,000
企 業	5	290,000	200,000
一 般 (旧教職員・篤志家等)	14	405,000	405,000
同窓会会員	60	1,145,000	1,145,000
後援会賛助会員	30	505,000	505,000
本法人関係	114	3,345,000	2,709,000
合 計	224	5,790,000	5,064,000

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業募金活動は、十九年六月、正式にスタートいたしました。これは、募財活動の中心を「生徒の教育活動支援」に置いているものでありますが、四月三十日現在での募金状況は、次の通りになっております。ご協力いただいた皆さまのご理解に感謝申し上げますと同時に、今後のご賛同・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

皇學館高等学校創立五十周年 記念事業 寄付者芳名 ③
皇學館中学校創立三十五周年

三重県		京都府		兵庫県		東京都		愛知県		同窓会会員		本法人関係	
五十万円	坂田 巧様	五万円	坂田 謙一様	五万円	六人部是充様	五万円	小 林 晃様	五万円	牧 戸 福子様	一万円	中 川 嘉人様	二万円	野 呂 恵子様
一万円	世古口 勉様	五千元	山本 喜子様	五千元	金森かね子様	五千元	深 草 正博様	五千元	日 栄 やす代様	一万円	前 田 和宏様	一万円	前 田 和宏様
一万円	糸川十志隆様	五千元	東 川 謙一様	五千元		二万円	野 呂 恵子様	二万円		二万円		二万円	野 呂 恵子様
一万円	坂口 真登様	五千元	中 井 哲夫様	五千元		二万円	深 草 正博様	二万円		二万円		二万円	深 草 正博様
一万円	山本 徹人様	五千元	山 本 喜 子 様	五千元		二万円	前 田 和 宏 様	二万円		二万円		二万円	前 田 和 宏 様

教員の更新講習を開設

2009年度施行「教員免許更新制」に対応

学園ニュース

平成21年4月から「教員免許更新制」が導入されるのに伴い、本学では教員免許更新講習の開設を決定。来年8月中に伊勢市、四日市市で計300人を対象に開講する予定だ。三重県内の私立大学で同講習の開設を表明するのは初。今秋にも文部科学省に申請し、認定を受ける。

多数の教職員を輩出する
大学として責務を果たす

平成十九年六月の改正教育職員免許法成立に伴い終身制だった教員免許に十年間の有効期限が設けられ、更新するには三十時間以上の講習を受ける必要がある。今回の講習開設はこの改正法を受けたものだ。本学は戦前より教員養成の名門として知られており、現在、全国で約四千人（県内は千二百人）が幼小中高の教員として活躍している。

現場の悩みに応え、
建学の精神を生かした内容に

講習の内訳は①「教職についての省察並びに子どもの変化、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項（十二時間以上）」と②「教科指導、生徒指導その他教育内容の充実に関する事項（十八時間以上）」となっている。②は大学の裁量権が認められており、本学も独自のカリキュラムを設ける方針だ。開設にあたって本学を卒業した教職員百十八名にアンケートを実施したところ、現場がさまざまな課題に直面している実態が明らかになった。「いじめ」や「不登校」など旧来からの問題のほかに、

「保護者への対応」や「安全管理」など世相を反映した悩みも多く寄せられた。講習ではこれらの要望に応えながらさらに、〈建学の精神〉を生かした内容を盛り込み、日本古来の伝統と文化への理解を深める講習を検討している。



平成19年2月に中国社会科学院日本研究所にて行われた学術交流協議の様式。

本学が中国社会科学院（CASS）と進めてきた共同研究が独立行政法人・日本学術振興会による「二国間交流事業 共同研究・セミナー」に採択された。同事業は日本学術振興会が二国間の持続的なネットワーク形成をめざし、資金の支給などを通じて優れた共同研究・セミナーを助成するもの。今回は新規採択率十七％という狭き門を突破しての採用となった。

中国社会科学院
CASSとの共同研究が採択
（独）日本学術振興会の助成制度

アジア的福祉文化
を研究

本学と中国社会科学院日本研究所（※）では平成十五年十月に締結した学術交流協定に基づき、両機関で福祉文化研究を行ってきた。今回、採択されたのはこれまでの探究を深めた内容で、テーマは「アジア的福祉文化」。実施期間は二年間で、地域と家族の絆に関わる福祉課題について名張市と北京とそれぞれにおいて考察し、解決に必要な福祉サービスの理念を検討していく。

新規採択率十七％
の難関を突破

特筆すべきはその研究方法だ。両国には昔から「老親扶養」「地域相互扶助」という考え方が浸透していたが、昨今、家族形態や社会情勢の変化などによりこれらの伝統は失われつつある。そうした状況下での事例を研究することで、福祉の実践に文化や価値観がどう深く関わっているのかを検証する。加えて本研究は名張市、北京の西フイールドにおいて進められるため、国家の違いだけでなく、地方と首都という地域特性が福祉サービスにどう反映されるのか検証できる点も意義深い。

※1 中国社会科学院 31の研究部、45の研究センター、4200名の研究員を擁する中国の最高学術機関。1977年に中国科学院から独立し設立され、哲学・社会科学分野における研究拠点として知られる。中国政府の最高行政機関である中国国務院に直属し、シンクタンクとしての役割を果たしている。

将来性などの条件をクリアする必要がある。本研究は場所を限定することでミクロな視点からの福祉課題を浮き彫りにし、それらを掘り下げることでアジア的というマクロな視点につなげていく。さらに国、文化、地域、家族像、伝統といった多軸からのアプローチを図る。単なる事例研究という枠組みを越えたこれらの手法は社会福祉の領域ではまだ知られておらず、本研究が終了した際には社会的インパクトも大きいと予想される。

教員免許更新制とは

- ①最新の知識技能を身に付けることが目的です。
- ②教員免許状に10年間の有効期限が付きまします。
- ③2年間で30時間の更新講習の受講が必要です。
- ④平成21年3月31日以前の免許状取得者にも更新制の基本的な枠組みが適用されます。

来からの問題のほかに、

他大学出身者も受け入れ、
地元教育界に貢献

現在、県内の教員数は約一万八千人で、毎年その十分の一の千八百人程度が更新講習受講の対象となる。

本学では伊勢、四日市の二カ所を会場に想定。一日六時間の集中講義を開く予定だ。時期は来年八月中、定員は計三百名を見込んでいます。

市川千秋同講習企画委員長は「開講は現場の先生と大学教員の交流の機



講習の企画委員長を担う市川教授。

社会福祉学部 開設10周年記念事業のご案内

今年、開設10周年を迎えた本学社会福祉学部ではさまざまな記念事業が開催される。事業の一部として、すでに名張学舎神明宮のご鎮座10周年を祝う祭典を4月に執り行い、記念論集も発刊。今後は7月と10月に講演会やシンポジウムを開く予定で、これまでの研究の成果を発表するとともにさらなる10年に向けた決意を示す好機となりそう。また、これらの事業には学内にとどまらず社会福祉関係識者や研究者、一般の方にも広く参加を呼びかける。詳しくは下記問合せ先まで。

事業予定

※会場はいずれも名張学舎

- 地域連携シンポジウム・講演会 7月21日(月・祝)
- 国際学術シンポジウム 10月3日(金)・4日(土)

テーマ 日本とアジアの社会福祉のゆくえー欧米との比較の観点からー

アジアの文化・社会に「根つき、花さく」福祉のあり方を、本学部が進めている日中学術交流の成果を踏まえ、比較検討する機会として今回のテーマを設定しました。

講演会 10月3日

【講演者】
新川敏光(京都大学教授)
ジェフ・ファンランゲンドク
(ルーヴェン・カトリック大学教授/ベルギー)
【通訳】一圓光彌(関西大学教授)

問合せ先 皇學館大学 社会福祉学部 管理課(名張学舎)

名張市春日丘7番町1番地 TEL 0595・61・3351(代) FAX 0595・61・3350
E-mail kanri@kogakkan-u.ac.jp http://fukushi.kogakkan-u.ac.jp/

シンポジウム 10月4日

【パネリスト】
クリス・ダーキン
(ノーサンプトン大学教授/イギリス)
高橋流里子
(日本社会事業大学教授)
王偉(中国社会科学院教授/中国)
高島昌二(本学名誉教授)
山路克文(本学教授)
宮城洋一郎(本学教授)
岩崎利彦(本学准教授)